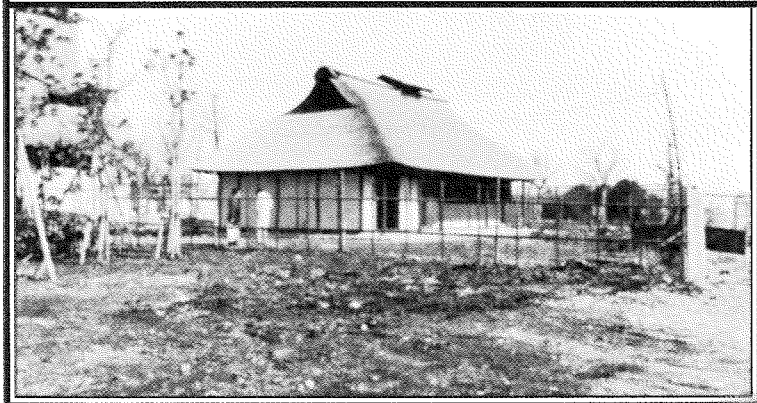
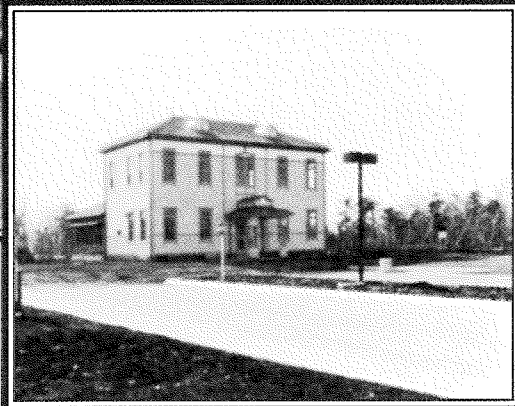
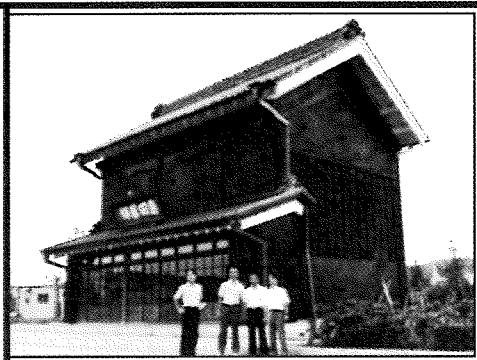
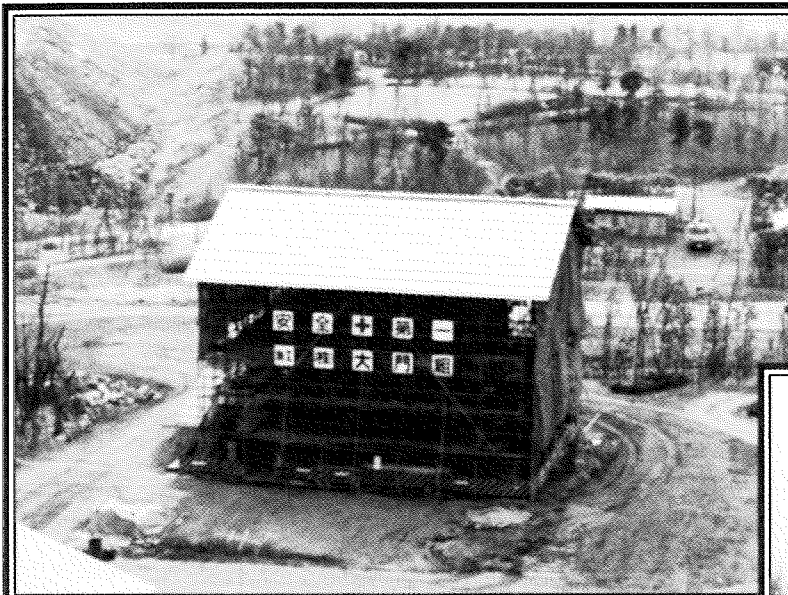


# あるむぜお81

府中市郷土の森博物館だより

al museo NO. 81

2007年9月20日



左上→右回りに  
\*移築中の旧島田家住宅覆屋 \*旧島田家住宅竣工時 \*旧府中町役場竣工時 \*旧河内家住宅竣工時  
下は現在の復元建物群

## 目次

- 1-2 はたちの思い出 その2  
復元建築物と伝統技術
- 3 展示会案内  
古代国府を掘る
- 4-5 ノート 『府中市史』 民俗編と宮本常一
- 6 収蔵庫のニューフェイス
- 7 最近の発掘調査  
西府地区で板碑が出土
- 8 展示室リニューアルトピックス ㊦



# はたちの思い

hopi

## その 2

## 復元建築物と伝統技術

渡邊保弘  
(文化財工学研究所 代表取締役)

府中市郷土の森博物館の広大な敷地の中には何棟もの市内に建っていた建物が保存されています。1960年代以降の経済成長期には、多くの古い町家や農家の建て替えが進みました。府中市はこの状況に文化的危機感を抱き、建物園を設立して貴重な郷土の建物を守り伝えようという構想を立てました。そして1987年の博物館の開館とともに、屋外に建物が移築公開されました。

博物館本館からのびる櫛並木は大國魂神社の参道を想定したものです。黒塗りの土蔵造の旧島田家と明治天皇ゆかりの旧田中家、それらに挟まれた園路は旧甲州街道を想定し、二つの園路の交差点は現大國魂神社前の交差点に相当するという具合です。旧郵便取扱所を含め、これらの建物は実際に旧甲州街道沿いに建っていました。

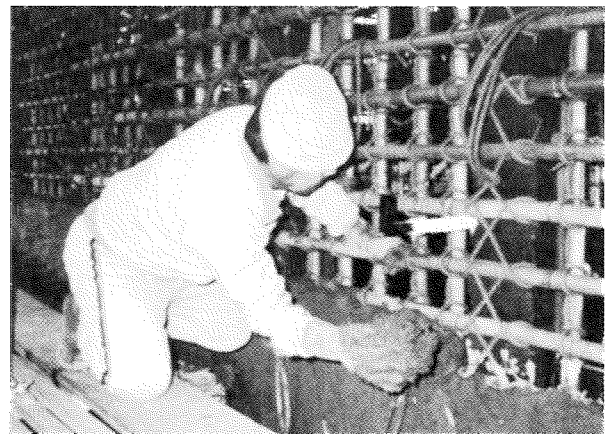
またこれらの奥に建つ茅葺き民家、旧河内家と旧越智家は園内に流れる川の南北にそれぞれ建っています。旧河内家は川の北側の高い場所に、旧越智家は川の南側の低い場所に。市内の農村も北半分が台地でハケ上と呼ばれ畑が多く、南半分は低地でハケ下と呼ばれ水田が多く、ハケ沿いには市川が流れていました。ハケ下では市川から導かれた用水路や水車が多く見られました。

園内の少し離れた場所に茅葺きの旧三岡家の長屋門がありますが、長屋門に至る園路沿いには、武蔵野の雑木林がすくすくと育っています。

これらは、単に昔の建物の羅列的展示ではなく、府中の歴史・地理的景観の保存と再現を試みた、かつての府中の縮図的表現なのです。

貴重な歴史的文化的な遺産を守る法律は1950年制定の文化財保護法です。さらに1996年に文化財登録制度が創設され、2004年には棚田や里山、用水路など地域の人工的な景観も文化的景観として保護の対象となりました。この法律・制度

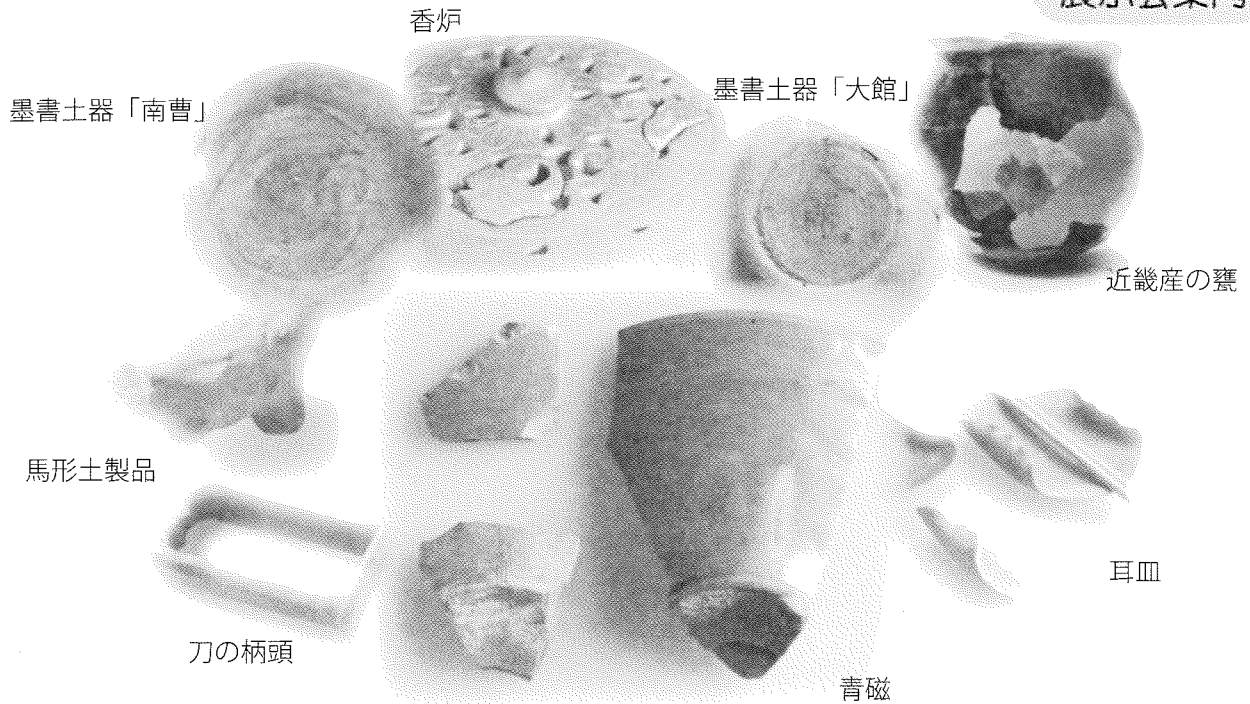
の拡充は、日本の原風景や有形無形の文化財が全国的に急速に失われている証左でしょう。特に伝統的技術、建築では大工や左官、茅葺き等の技術は活躍の場が限られ衰退の一途を辿っています。



旧島田家住宅 左官工事 壁荒打ち

私はこの博物館の多くの復元建物移築の、計画設計や工事監理に携わった者のひとりですが、移築工事には優れた技術を持つ堂宮大工の棟梁や、左官、茅葺き、石工の各親方が工事に携わり、困難な工事を完成させました。20年経った現在、大工の棟梁は高齢で退職され、その他の方々は他界され、いずれも後継者が育ちませんでした。昔の建物は残っても、それを維持する技術の衰退の方がより急速です。思えばここは良い時期に建物が移築されたと思います。

町の文化、ハケ上ハケ下の農村の文化、それらを取り巻く自然が展開し、郷土の文化的遺産と風土を大規模で総合的に保存展示している郷土の森博物館のような例は極めて稀です。ただそれを維持する技術が年々失われている深刻な現状があります。「郷土の森」の展示や行事を通して、失われつつある日本の文化を再認識し、日本の伝統のこれからのを考えて下されれば幸いです。



古代国府を掘る 23

# 海を渡ってきた緑色の焼き物

10/31 (水) まで

今回は、常設展示室の入口で開催している「古代国府を掘る」という、ささやかなコーナー展示をご案内しましょう。

府中は、古代に武蔵国の国府が置かれたまちです。その実態は、1975年以來継続している発掘調査によって、徐々にではありますが確実に明らかになって来ています。出土する品々も多彩で、国府が置かれたことを物語る、国府ならではの貴重なモノも少なくありません。こうした出土品は、府中市教育委員会と連携して毎年行っている速報展示会や特別展、そして常設展示室で随時展示していますが、なかなか一つ一つの出土品が持つ豊かな情報を紹介し、解説するのは難しいものです。

そこで、2001年から始めたのが、このコーナーです。小さなケース1台だけを使った、本当にささやかな展示ですが、年4回の展示替えを繰り返して、今回で23回目となりました。これまでに上の写真のほか、扇、銅鏡、秤の錘、朝鮮半島製の鏡などを展示してきました。

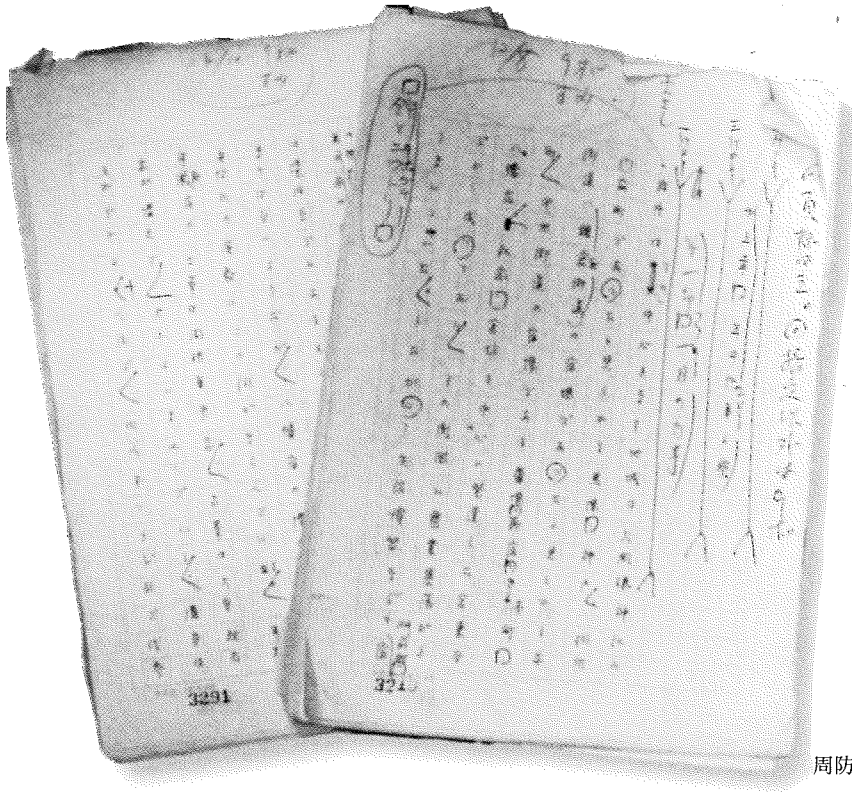
そして今開催しているのが、「海を渡ってきた

緑色の焼き物」です。展示しているのは、一昨年の発掘調査で出土した青磁という焼き物。オリブ色をした独特の色合いを、ぜひご覧いただきたいと思います。

この色合いから、青磁は中国の浙江省にある越州窯で作られたものと判断できます。製作年代は9世紀でしょう。それほど大きくない破片ですが、口の直径が14.5cm前後に復元できる碗です。この時代の青磁は、全国的にも珍しく、関東地方ではめったに出土しません。まさに舶来品として珍重された器なのです。武蔵国府へは国司が都から携えて来た、と考えるのが一番高い可能性でしょう。そして、この器を目にした武蔵の人びとは、やはり独特の色合いに魅せられたに違いありません。

さてさて、しかしながら、このコーナー展示は今回をもってしばらくお休みします。11月から始まる常設展示室の更新工事に伴い、ケースを置くスペースがなくなってしまうのです。紹介したい出土品はまだまだあるので、再開できる日を楽しみにしています。  
(深澤靖幸)

# 『府中市史』民俗編 と 宮本常一



宮本常一直筆原稿  
『府中市史』民俗編  
(年中行事と祭の章)  
周防大島文化交流センター蔵

## 『府中市史』民俗編

昨年『新版 府中市の歴史』という本が出版されました。これは1967年(昭和42)～1974年(昭和49)にかけ出版された『府中市史』(上下巻。後に再版された際は下巻を中巻と下巻に分割し三冊組。現在絶版)の後を受けてつくられたものです。伝承、年中行事、生業、祭礼、町のくらしの変遷などをまとめた下巻民俗編は、当時府中市に住んでいた日本を代表する民俗学者 宮本常一が中心となって編さんされました。私はこの『府中市史』民俗編がどのように調査、編さんされたのかに興味を持っています。

1968年(昭和43)より、民俗編に関する調査がはじまり、6年をかけ1974年(昭和49)に下巻は完成しました。また、それまでに市史の補助本として『府中市の現存草葺民家調査集』(1969)、『府中市の現存民具調査集』(1970)、『府中市の庶民生活調査資料集』(1970)といった資料集の編さんも行われました。いずれも宮本を中心に行われ

たものです。1961(昭和36)以来府中市に転居してきた宮本にとって、市内各所をつぶさに巡ることになるきっかけとなりました。宮本は縁が多い府中を一目見て気に入り、この地に住むことを決めたそうです。そんな府中が徐々に変化していくのを眺める心情はどのようなものだったのでしょうか。

## 調査に歩く

宮本は、武蔵野美術大学の学生を中心とした「生活文化研究会」のメンバーとともに調査を開始します。1969年に行われた「府中の民俗資料」と題する講演の中で、民俗調査の現在について次のように述べています。

古老の話っていうのは、ずっと以前、たとえば私が戦前、昭和15、6年ごろに達した80歳以上の年寄りですと非常に正確にものを覚えておったの

ですが、それ以後のお年寄りの方々は必ずしも正確にものを覚えていないのです。なぜそうになっていったかという、文字を知っていったのです。文字を知ってそれと記録と両方が糾える縄のようになってきますと、記憶違いというのが大変たくさん出てくるものなんです。

文字を持たないで記憶していった場合には、繰り返してやっているから記憶が非常に正確なんですけれども、今日の記憶はたいして民俗学の役に立たないのであります。むしろ民間の伝承が民俗学の大事な資料になるとするならば、伝承って言うのは必ずしも言葉だけにあるものではないのです。

この言葉のとおり、墓石や石碑の調査、昔のこをよよく知る方への聞き取り調査はもちろん、草葺民家の間取りを計測したり、民具資料の実測調査をしたりしました。民俗編の編さんは、さまざまな視点から言葉、モノなどを複合的に資料として採集することからはじまったことがわかります。

宮本も『府中市史』のあとがきに述べているように、1969年～70年には安保闘争などの影響で計画的な調査研究活動が難しい状況でした。そしてその頃は高度成長の中で、府中のくらし・景観がどんどん変容していく時期でもありました。その中で調査執筆は行われ、ついに読み応えのある民俗編が完成したのです。

## 暮らしを記録する意味

こうした宮本の調査、執筆の意図は、府中という土地にこれだけの特徴的なものがあるのだ、ということ、住んでいる人々に知ってもらい、それを誇りにしてもらいたかったのだと思います。民俗調査を通じて人々に自信を持ってもらうという考え方は、新潟県山古志村、佐渡、故郷山口県周防大島など、府中に限らず多くの場所で宮本が提言してきたことでもあります。

宮本は、一冊の本を編さんしたことで府中市史の民俗編が完成、完結したとは思っていませんでした。市史編さんの途中の1974年(昭和49)2月9日行われた市史編さん委員会において、彼が次のように述べたことが記録されています。

庶民生活の変遷に力点を置き、古いものから新しいものへの移行する過程を多くの人々に接し

てまとめぬいた“生活史”であるとのべ、読み通しが出来るよう工夫したとそのねらいをのべた。・・・(中略)・・・現段階の調査は序の口であるので、歴史が埋没してしまわないためにも、調査を続け、その積み重ねでまとまったものは、逐次市史の続編として刊行していくよう考慮してもらいたい、と将来への希望をのべて結んだ。

(齋地徹氏筆による市史編さん委員会の記録より)

宮本の述べるとおり民俗の調査は、文書のみならずモノや人々からの聞き取り等をもとにしてその土地のくらしとその変化をまとめていくことが多いように思います。文字資料でない情報源を多用するため、新たな資料はどんどん発見されますし、訂正すべき情報も多く出てきます。ゆえに何度でも再調査し現状を把握し、書き改める必要があります。その作業には聞き取り当時から人々のくらしがどのように変わっているのか、あるいは変わっていないのかを知る手がかりもひそんでいきます。

日本を代表する民俗学者・宮本常一がどのようなまなざしで武蔵府中を眺めたのか、どのような民俗調査を行ったのかを再確認することもできます。さらには日本民俗学が自治体史にどのように関わったかをさぐるための材料ともなります。こうしたことを見つめなおすことは、私たちが今後人々のくらしをどのように読み解いていくかを改めて考えることにもなるのです。

土地の歴史やくらしを知ることは、単に過去への興味関心を満足させるにとどまりません。現在の私たちを知り、今後どう暮らしていくべきかという未来へ向けた視点とも密接に関わっています。くらしがどのように変化するのか、そしてその中から自分たちがこの土地でどのように生きていくかを考える手段とすべく、『府中市史』は編さんされているのだと思います。

府中市内の本格的な民俗調査は『府中市史』の調査以降ほとんど行われておらず、府中市内の民俗を知る基本文献は、発行後30年以上が過ぎた現在でも本書です。その後の調査が進んでいないこともあります。それ以上に情報量が豊富で参照に耐えうる内容だからです。そんな本書の成立過程を追いかけるにとどまらず、その内容をもとに現在伝承されているくらしを把握していく作業も、今後も忘れずに行っていきたいと思います。

# 収蔵庫の ニューフェイス

行火

寄贈：一ノ瀬利喜夫氏



右のようにフタを開け、中心の丸い部分に豆炭（中下の黒い塊。使う時は熱する）を入れて使用しました。

市内片町の家に残る昔の道具を処分するとの連絡を受け、戦時中に使用した軍服、千人針などとともにおいてきたものです。この道具の利用法もさることながら、この行火という字、現在ではどの程度の人が読むことができるでしょうか？使った思い出のある人もどんどん少なくなっているのではないのでしょうか。

金属製で大きさは幅 15 cm、長さ 19 cm、高さ 10 cm。豆炭という小さな練炭を中に入れ、発熱させます。そして椅子の下や布団の中などに置き、主に足を暖めるのに使用します。かつての行火は土製で、炭を入れて使用していましたが、耐熱、燃焼時間などが徐々に改良され、さまざまな形に進化していきました。これはその代表です。ちなみに、当館が豆炭を使用する行火の寄贈を受けるのはこれがはじめてのことです。

写真の行火は、商品名「品川あんか」と呼ばれるもので、昭和 30 年代になって発売されたものです。製造は品川燃料株式会社（現：シナネン）。発売当時、新聞・雑誌・テレビなどで大きく宣伝され「豆炭 1 個で 24 時間保温」のキャッチフレーズで知られていたものだということです。この品川あんか、現在でも販売されているようですが、電気行火や電気炬燵、エアコンなどの普及によっ

てその姿を見なくなっている、絶滅が危惧される道具ではないでしょうか。

筆者自身、電気行火使用世代で、この行火を使用したことはありません。もちろん、燃料となる豆炭（炭を練って燃えやすい形状に固めた練炭、それを小さくしたもの）も使用したことはありません。まだ 50 年も経っていませんが、つい最近と思いがちな昭和 30 年代の道具でさえ、どんなことに使用したのかわからなくなる日が近づいているのかもしれない。

ところで最近おかしの道具を扱う博物館や資料館にとって、行火は取扱いを注意しなくては行けない道具の一つとなっています。それは豆炭を入れる部分に、耐熱にすぐれてはいるが、人体に害を及ぼすとされる石綿（アスベスト）を使用している可能性が指摘されているからです。

しかし当館資料のニューフェイスとして登場したこの行火、現在の発売元・シナネンのホームページには「生産開始以来アスベスト（石綿）を使用したことは一度もありません」と断言されています。耐熱部分の素材は「耐熱ガラス繊維・ロックウール」でできているのだそうです。ご安心ください。

# 西府地区で板碑が出土

本宿町一丁目 府中市遺跡調査会 稲田 昭彦

2008年度(平成20)に誕生するJR南武線西府新駅に伴う発掘調査成果については、本誌でも紹介してきました。なかでも、中世の居館を囲う大型の溝の発見は、注目される成果でした。

最近の調査でも、同様の溝が第五小学校の北東角付近で発見されています。この溝から、板碑が完全な姿で出土しましたので、今回はこの板碑を紹介します。

板碑とは、中世(鎌倉～室町時代)にさかんに作られた供養塔の一種です。ふつう板碑は、死者の供養や、生前に死後の安寧を願って造立されました。人々は、仏教に精神的な安らぎを求めていたのです。

今回出土した板碑は、全長70cm、幅22cm、厚さ2cmで埼玉県秩父地方産の青石(緑泥片岩)で作られた、武蔵型板碑と呼ばれるものです。上部に阿彌陀三尊をあらわす種子(仏を表す梵字)が刻まれていて、その下に応永二十六年(1419)や□□禪尼の銘文がありますので、室町時代に□□禪尼を供養するために造立されたことが分かります。

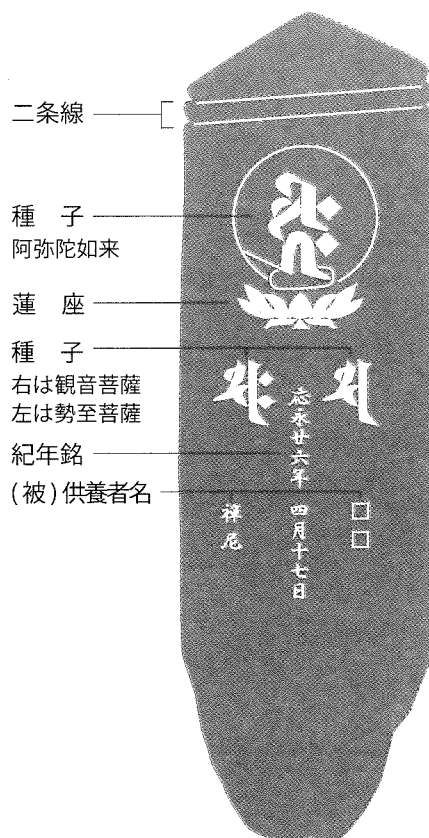
この板碑は、溝が半分程埋まりかけたところから発見されました。溝への土の流れ込み方や、板碑の傾き方などからすると、溝の縁から滑り落ちるように埋まっていったと考えられます。この溝は途中で行き止まりになっていて、区画の角、境界など、やや特殊な場所という趣をもっています。板碑は境界の目印のように立っていたのかもしれませんが。

板碑には、死者への思い、願い、祈り、心の平安など様々な思いが込められています。合戦などの不安要素が背景にあると考えられますが、生命の尊さはいつの時代でも変わる事はありません。

市内の板碑は、矢崎町三千人塚の鎌倉時代の板碑〔康元元年(1256)〕が多摩地区最古のものとして今でも現存しています。また、郷土の森博物館にも数多く展示されています。じっくり見て下さい。そこには、その時代を生きた人々の証が刻まれています。



出土した板碑

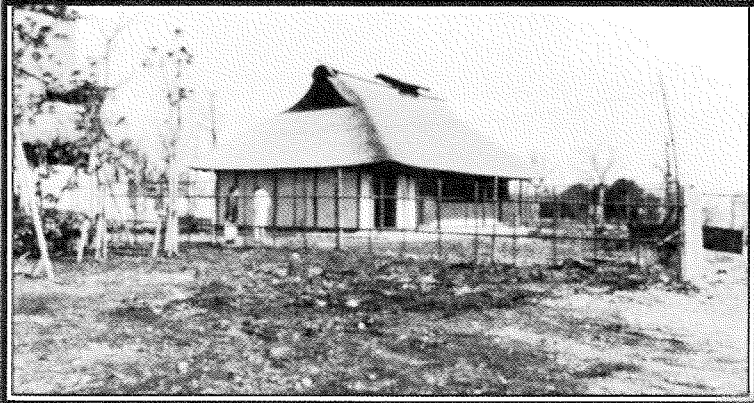
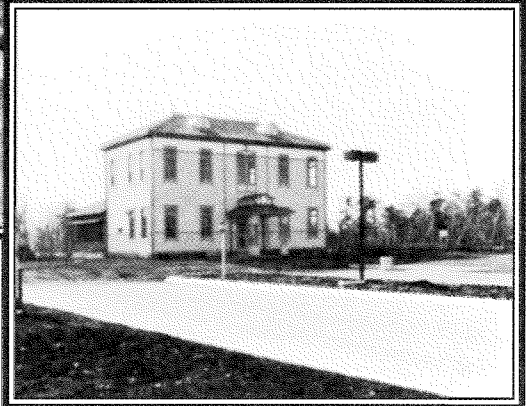
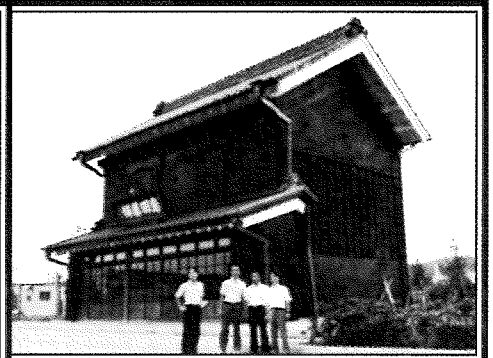


# あるむぜお81

府中市郷土の森博物館だより

a / museo NO. 81

2007年9月20日



左上→右回りに

\* 移築中の旧島田家住宅覆屋 \* 旧島田家住宅竣工時  
\* 旧府中町役場竣工時 \* 旧河内家住宅竣工時  
下は現在の復元建物群

## 目次

- 1-2 はたちの思い出 その2  
復元建築物と伝統技術
- 3 展示会案内  
古代国府を掘る
- 4-5 ノート 『府中市史』 民俗編と宮本常一
- 6 収蔵庫のニューフェイス
- 7 最近の発掘調査  
西府地区で板碑が出土
- 8 展示室リニューアルトピックス ㊸

